

# 「水」でもよかったのか？

## 《トリスタンとイゾルデ》の「媚薬問題」について

2022/07/09



### 媚薬問題は四つ

ワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》でいつも問題になるのは、トリスタンとイゾルデが二人で同時に飲んだ「媚薬」についてです。

問題は四つあります。「媚薬とはなにか？」と「なぜ、ブランゲーネは媚薬を

持っていたのか？」と「トリスタンとイゾルデは愛しあっていたのに、なぜ、媚薬が必要なのか？」と「なぜ、ブランゲーネは、毒薬ではなく、媚薬を差し出したのか？」です。

## 媚薬とはなにか？

この場合、「媚薬」は二通りあります。本人が嚥んで効く「強精剤」としての「媚薬」と本人が嚥んで相手を性的に発情させる「性フェロモン」を発出する「媚薬」です。《トリスタン》に出てくる「媚薬」は、本来、イゾルデの母親が魔法を使って作った「強精剤」、すなわち、現代でいう「バイアグラ」としての「媚薬」でした。若い王女のイゾルデが自分の父親ほどの年齢である年老いたマルケ王と結婚するので、マルケ王に飲ませるために、侍女のブランゲーネに持たせたものです。ところが、実際には、トリスタンとイゾルデが双方同時に嚥んだ「媚薬」は、お互いに強く愛し合うことになった「性フェロモン」として効いたのです。ワーグナーは、「媚薬」をこの二つの効果が同時にあるものとして用いているのです。まあ、物語であり、イゾルデの母親はアイルランドの魔女だから許されるお話です。もし、ふうてんの寅さんが聞いたら、「おれがイモを食ったら、おめえのケツから屁(へ)がでるか」(失礼)とバカにしたことでしょう。また、イゾルデの母親は、敵が現れたときに毒殺するように「毒薬」も持たせました。これは、モロルトの剣に塗った毒薬と同じものだったと思われま

## トーマス・マンの暴言

「このクスリを飲むことによって、二人は突然愛し合うことになる」というのが物語における本来の媚薬の役割です。ベディエの本ではそうになっていません。ところが、ワーグナーの《トリスタン》では、二人は媚薬を飲む前から愛し合っているのです。それなのになぜ改めて媚薬を飲む必要性があるのか — というのが「媚薬問題」です。

それについてトーマス・マンは、次のように言います。

愛し合う二人が飲むものは、実際は単なる水であってもよいのです。

マンは、「媚薬は彼ら二人の肉体に効いたのではなく、心理に効いたのだ」というのです。すなわち、二人は「禁断の愛」という罪の意識から解放されたのです。すべてクスリのせいなのです。でも、本当に「水」であってもいいのでしょうか？ どうやらこれは、マンの暴言です。

## アリバイ作りの媚薬

ブランゲーネから媚薬を飲んだ経緯を聞いたマルケ王は、死んだトリスタンと死ぬ寸前のイゾルデを前にして、「前にわからなかったことが明らかとなって、トリスタンに罪がないと分かったときの喜ばしさ！」といます。マルケ王も納得して、これで「媚薬問題」は見事に解決されました — とはまだ、いかないのです。こんな簡単なアリバイ作りで、だまされるようなマルケ王でしょうか？

## ブランゲーネの独断

ところが、「媚薬問題」はもう一つあります。「なぜ、ブランゲーネは死の薬ではなく、媚薬を飲ませたのか？」です。イズルデが、「死の薬を杯につぎなさい」と命じたにもかかわらず、なぜ二人に、お互いに愛し合う「愛の媚薬」をのませたのでしょうか？ これは、完全に、ブランゲーネの独断です。でも、彼女には、それ相当の理由があったのです。

ブランゲーネは、イズルデ姫を危険から守るようにと母親の王女から命じられて、魔法の薬持参で付き添ってきたのです。ブランゲーネは、トリスタンの迎えの船に乗ったときから、イズルデ姫の様子がおかしいことに気がついていました。不機嫌で、怒りやすく、落ち着きがなく、なにか気に入らないことがありそうでした。本来なら、アイルランドと君臣関係をもつ宗主国の国王のお妃として嫁(とつ)ぐのですからなんの不満も不安もないはずです。ブランゲーネは、ようやくイズルデが「タントリス」の話をしてくれたので、「どうもイズルデはトリスタンを愛している」と気がつきます。ブランゲーネには、マルケ王の方が、身分も、勢力も、財産も上なのに、どうして家来のトリスタンを愛するのか分からなかったのです。侍女根性です。

### ブランゲーネ

世にも気高い勇士トリスタンさまさえ忠実に仕えておられる王さまではございませんか。お妃として王さまのおそばにいて幸福を共にしたいと願わない女が、この世にございますでしょうか？

お姫さまのために選ばれたマルケ王が、たとえどんなに冷たい人であっても、それに、なにかの魔力がマルケ王をお姫さまから引きはなしたとしても、そんな王さまなら、私たちがまち金縛りにしてやりましょう。不思議な愛の力(媚薬のこと)には、王さまだって縛られるに違いありません。お母さまの魔力をご存知じゃございませんか？

お姫さまは、なにごともお存知ですが、お母さまがお考えもなしにわたくのお伴を命じたとお考えですか？

ブランゲーネには、イズルデがなぜ、トリスタンを愛しているのかが全く分からないのです。

### イズルデ

(じっと前方を見つめて) [トリスタンの花嫁としてではなく] 愛されもしないで、身分ばかりお高い方とたえず一緒にいるなんて、そんな苦しみに私はどうしてたえられましょう。

私のために介添えとして選ばれながら、私の夫になる資格を失われたあのひと。気品があって健やかで、敵には大胆なくせに、愛する人には臆病なあの人。ああ、死ぬために捧げられた頭、死ぬために作られた心。

## 中世の騎士道精神

イズルデが、トリスタンを愛していることはもうはっきりしました。でも、そうかといって、お互いが「愛している」とは言えないのです。ときは、中世です。騎士道精神が旺盛なときでした。マルケ王の甥で、家来で、自らが王のために花嫁を薦めたトリスタンにとっては、イズルデを愛しているとは、

決していえません。イゾルデはイゾルデで、女の方から愛しているとは言えません。このままでは、二人もお互いの愛を胸に秘めたまま、死ぬより仕方がありません。「死なせてなるものか」 — と思ったのがワーグナーとブランゲーネです。それで、媚薬の登場となったのです。

## ブランゲーネの責め苦

講座の資料にも書きましたが、媚薬を嚙んで、お互いに遠慮なく愛し合うようになった二人に、ブランゲーネは「警告の歌」を歌います。私はこのブランゲーネの歌が大好きです。夜の静寂を破らないように、ブランゲーネはスーッと一本の細い矢が流れるように「一人目覚めて見張っている」と「ソット・ヴォチェ」（静かに押さえた声）で歌います。警告の言葉にふさわしく、押さえたこの声には、繊細ではあるものの、緊張感と危機感に富んだ厳しさがあります。そして、ここにはお守り役としての「侍女の責任感」が感じられます。この歌では、これが一番大事なことなのです。二人の愛は禁断の愛で、決して許されるものではありません。しかし、ブランゲーネの歌には全く非難めいた響きがありません。愛する二人を心からよろこび、また、心配しているのです。二人を非難さるべき愛に落としたのは彼女だからでもあります。一方、トリスタンの臣下のクルヴェナールは、二人の愛を許しません。元はといえば、すべて、イゾルデが悪いのです。イゾルデが大事なトリスタンを誘惑したに違いないからです。それに、イゾルデが死の薬を飲ませようとしたために起きた事故だからです。それに加担したブランゲーネも許せません。結局、二人への責任はブランゲーネが一人で担っています。



## もう一つの「愛の妙薬」

ドニゼッティのオペラに《愛の妙薬》があります。これは、《トリスタンとイゾルデ》のパロディです。また、このパロディが良く出来ています。台本は、

ご都合主義の作家としておなじみのウジェーヌ・スクリーブ（1791-1861）です。村で一番貧乏な若い農夫ネモリーノは、村で一番の美人でお金持ちで本も読めるアディーナが大好きです。でも、身分も資産も教養もまったく違うネモリーノには、アディーナに「愛してる」などは決して言えません。アディーナは、自分のことを生命よりも大事にしてくれる人が現れるのを待っています。そこへ、ニセの薬売りドゥルカマーラが、「愛の妙薬」を売りに来ました。ネモリーノは早速買って飲みました。でも、自分が嘔んでもアディーナにはまったく効きません。もっと薬を飲みたいのですが、お金がありません。仕方がなく、軍隊に入って薬を買うお金を手にいれました。軍隊に入れば、明日の生命も分かりません。「死んでも良い。あの人の愛の言葉が一度でいいから聞きたい」と思ったのです。そのことをドゥルカマーラから聞いたアディーナは、ネモリーノの生命を賭けた愛に気がついて、「愛しています」といいます。二人は、めでたく結ばれます。ニセ薬売りのドゥルカマーラは、「ワシの薬が効いた。ワシは世界一の薬屋だ」と言いながら村を去って行きます。お互いに愛していると言えない若者二人を結びつけたのが、やはり、《トリスタンとイゾルデ》と同じ「愛の妙薬」でした。そのことをスクリーブは知っていたのです。現代の医学では、ニセ薬も効くとされています。これを「プラシーボ効果」と言っています。そうすると、マンの言うとおりに、水で良かったかも知れませんね。

### 漱石の忠告

漱石が、「アイ・ラブ・ユウ」は「月がきれいですね」と訳せと言っています。二人で歩いているときに、「愛しています」などとは言えません。代わりに、「月がきれいですね」としかいえません。相手も、「風がさわやかですね」としか答えようがありません、でも、お互いに、実は、「アイ・ラブ・ユウ」といっているのです。このとき、月と風は、媚薬の務めを果たしているのです。遠慮せずに、手を握りましょう。

